

2022年 4月 24日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「イエスのたとえ④ ぶどう園と農夫」 マルコによる福音書 12章1-12節 高橋彰

◆「ぶどう園と農夫」のたとえ

12 イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。2収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。3だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきに、何も持たせないで帰した。4そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。5更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。6まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。7農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』8そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。9さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。10聖書にこう書いてあるのを讀んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』

11 これは、主がなさったことで、
わたしたちの目には不思議に見える。』

12 彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話された気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

イエスが語られた「譬え」を取り上げる4回目です。この譬えが、イエスがエルサレムに入城され、ご自身が受けることになる十字架の苦難を予告された後に配置されているのは、初代の教会の人びとがこのたとえをイエスの身に起きた十字架の苦難と復活の出来事と重ね合わせて受け止め、解き明かして伝えてきたことを証しています。

ユダヤの人びとにとって、ぶどう園、主人、農夫などのモチーフはイスラエルの神を語る大事なイメージとして語り継がれ共有されていたものでした。預言者イザヤの「ぶどう畑の歌」は主が「よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた(イザヤ5:2)」ぶどう畑をイスラエルの民になぞらえ、酸いぶどうが実ってしまったことへの裁きや世話を怠った農夫たちを民の指導者たちになぞらえて語っています。派遣した僕たちを預言者たちと重ねて、忠告を与えたのに聞き入れなかったため、このぶどう畑は踏み荒らされると、イザヤは厳しい裁きの預言を告げました。イエスの譬えを聞いた人びとは、おそらく何度も聞かされ続けてきた預言者たちの言葉も思い起こされながら聞いたことでしょう。

イエスのたとえそのものも、過激な話です。暴力的な表現がなされますが、その背景にすでに構造的な社会の暴力があります。

神がすべての者たちに平等に与えた土地は、各自が耕して自分たちの糧を得る先祖伝来の嗣業の地ではなく、豊かな者に占有されて垣がめぐられ、ぶどうが植えられています。農夫たちは雇われの小作農夫の身分になっています。主人は各地の所有地を見回りに旅します。貧富の差が加速する社会で苦しむ人びとの怒りや憎しみ、敵意が増幅しています。

ぶどう園の収穫は、最初の三年は食わず、四年目の実りは神への捧げものとし、五年目の収穫から人びとは糧を得ました(レビ19:23-25)。決算の時(カイロス)が衝突を起こします。遣わされた僕は、殴られ、頭を傷つけられ、暴行され、殺されます。最後に主人の息子は殺されて「外に放り出され」ました。小作人たちの怒りは、反撃で解消されたでしょうか。それはさらなる暴力を生み、死をもたらしました。そして農夫たちはもっと巨大な力で、いのちも土地も奪われました。預言者イザヤの時代も、イエスの時代も、そして今も、土地の所有や収穫の争いは形を変えながらも暴力と奪い合いが続いています。

イエスは、預言者たち(イザヤ8:14-15, 28:16)や詩人(詩118:24, 25)が伝えたように、外に放り出され、捨てられた石が土台に、隅の親石になると告げられました。

